

日本へようこそ—WIN 世界大会裏舞台

WIN-Japan, 三菱電機(株) 西村純子

■ WIN 産みの親は日本

「WINの産みの親である日本にまた来ることができて、とても嬉しく思います」。ウェルカム・パーティーでの第一声を、イレネ・エゲテ スイス連邦原子力安全委員はこう日本語で始めた。イレネは、原子力や放射線関連の職業に従事する女性の団体WIN(Women in Nuclear) - Globalの創始者のひとりであり、初代会長を務めた人である。今ではWINは、57ヵ国に2,000人以上の会員を有する。年に1回、世界各国で大会を開催しており、今年2004年は、初めての日本開催となったのだ。

なぜ、日本がWINの産みの親なのか。それは今から13年前に遡る。東京で開催された原子力広報に関する国際会議に集まった原子力分野の女性たちは、こういう女性の団体を作ってはどうかと話し合っていたのだ。その話からWINの設立に話が進み、1993年に初のWIN世界大会がフランスで開催された。

その後、会員も徐々に増え、ヨーロッパ以外の地域にも活動が広がるとともに、毎年世界大会が開催されてきた。大会は、開催国が会議費用を負担し、総会、技術講演、視察などのプログラミングや手配などすべてを実施する通例である。初めての日本開催。当然、WIN-Japanの会員にとっては初めての主催。それどころか、これまで世界大会に参加したことがない会員がほとんどで、「本

当に私たちにできるのだろうか？」という気持ちを抱えながら、WIN-Japanは2003年の1月に、本格準備を始めた。

■ 準備に追われた日々

私は、参加者の募集と登録を担当した。まずは、登録用のウェブ・ページを自分たちで作成し、参加者データベースを作った。こう書くとしても簡単に聞こえるが、実際は全国にちらばっている会員間でさんざん電子メールのやりとりをし、何回もテスト入力をして、やっと動くようになった。

登録開始を周知した翌日、早くも登録が。それは冒頭のイレネからだった。早速電子メールを返す。「イレネ、登録第1号ありがとうございます。お会いできるのを楽しみにしています」。この調子で、登録者には極力メールを出した。嵐の前の幸せなひとときだったと言える。

さまざまな問い合わせも受けた。大は「渡航費用を出して欲しい」というものから、小は「テクニカルツアーでのドレスコード」(これも大きな問題ではありますが)まで。箱根の超高級旅館について意見を求めるもの、アメックスのなんとかカードは日本で使えるか、おみやげ用に来年のカレンダーは買えるか、日本円はどのくらい持っておけばいいか…。

嵐がやってきたのは、登録を締め切り、名簿作成に入ろうかというあ

たりからである。出席を取り止める、出席日程を変更する、苗字と名前を逆に登録したので直して欲しい(日本、韓国、中国人には、苗字・名前とファーストネーム・ラストネームの対応がつけにくい)、やっぱり夫も連れて行く(結局、夫同伴は3人)等々、多くの変更連絡が入って来た。ぎりぎりまでどたばたしつつ、参加者リストを作成した。

当日が近づくにつれ、実際の会議運営について滝のようにメールがきて、機関銃のように打ち返す日々が続いた。しかも、これらの準備をどの会員も、自分の本来の業務のプラスアルファとしてこなしていたのだ。もういい、何でもいから早く終わってくれ、と不埒なことを考えつつ、いいかげん疲れたまま、いよいよ前日、会場の東京ドームホテルに乗り込んだ。

ロビーでいきなり韓国からの参加者一団と会った。部屋の前の廊下にはスウェーデンとチェコからの参加者がいる。再会を喜びつつ、私は、「こ、この人たち、ほんとに日本まで来てしまったんだ」と冷や汗が出る。本当に明日から私たちはこんな大きな会議を開催できるのだろうか？

■ 日本文化で交流に華

5月17日、会議は始まった。理事会、アジア会議等を経て、18日にはいよいよ全体会議が始まる。私は総合司会担当で、何週間も前から「I



WIN 世界大会での記念写真。みんなとてもいい笑顔なのが見えますでしょうか？

declare the 12th WIN annual meeting now open, (WIN 世界大会の開会を宣言します)」と言っているところを想像すると、胸がいっぱいになっていた。とうとうこの台詞を日本で言える日が来たのだ。

講演、総会、各国報告と順調に進み、その日の夜はウェルカム・パーティーである。初めて WIN の世界大会に参加したとき、会議終了時に「皆さん、ディナーまであと 30 分しかありません」と司会者が言うのを、部屋に資料を置いて来るだけなのに、なんで 30 分「しか」なんだろう、と不思議に思ったことがある。しかし、いざディナー会場に行くと、私以外の全員が、昼間のビジネススーツからドレスに着替えていたのだ。ダークスーツのおじさんに囲まれた普段の宴会とは比べ物にならない華やかさで、万歳三唱も一本締めも、もちろんあるわけではない。というわけで、今回は会議が終わると部屋にかけ戻り、着物に着替える。日本会員の 10 人近くが着物を着た。

パーティーは着物着付けイベントで、さらに盛り上がった。これはデモンストレーションに続いて、会場からの 2 名に振袖を舞台上で着付けるというもので、司会者は「誰も手をあげなかったらどうしよう」と心

配していたのだが、いざその段になると、司会者の言葉が終わるか終わらないうちに、わあっと手が上がり、何人かは舞台目掛けて突進して来たのだ。舞台上上がった 3 人の睨み合い(?)の末、ひとりがあきらめ、スロバキアとアメリカの会員に舞台上で振袖を着せた。2 人は本当に嬉しそうに会場を回り、記念写真を撮り合っていた。

東京での会議、市民フォーラム、東京電力・柏崎刈羽原子力発電所見学を終えた私たちは、広島へのオプショナルツアーに出発した。平和記念資料館では、表情も沈みがちだったが、ディナーではすっかり浮上した。全員が輪になって「やっさ踊り」を踊ったのである。広島県三原市の、阿波踊りに似た踊りだ。ベストダンサー、ユニークダンサーに賞も贈られ、笑顔が絶えなかった。後日、フィンランドの会員から、「フィンランドの原子力学会誌に、今回の大会の記事を書く。ついては、広島で踊った踊りの名前を教えて欲しい」との問い合わせがあった。「イツヤッサ・ダンス!」。私は胸を張って答えた。

■自信を持って

本当に開催できたのだ。WIN-Japan 発足後 4 年。原子力業界では

まだまだ少数派の女性だけで、200 人もの参加者を集めて国際会議を開催できたのだ。どうだ、すごいだろう、と言って回りたい気持ちでいっぱいである。会員は大きな自信を持ったと思うし、この自信をもとに、みんなもっと大きな仕事にチャレンジしていこう。

また、WIN のなかで私たちはそれぞれに役割モデル、仰ぎ見る師匠を見つけることができる。自分が役割モデル、師匠となって、後輩を育てることもできる。それぐらいのこと、と思われるかもしれないが、役割モデルの存在は、仕事を続けていくうえで重要な意味を持つ。

アメリカの WIN の大会キャッチフレーズにこうあった。「男たちは何十年もしてきたこと、あなたにもできます。WIN のネットワークを通じて実力をつけよう!」

この大会を通して、確かに私たちの実力はついたと思うのだ。



[にしむら・じゅんこ 理事、電力・社会システム事業所総務部研修課長兼原子力広報担当課長]